

あ と が き

平成29年度の『富岡製糸場総合研究センター報告書』が刊行できた。今年度も富岡製糸場保全課の中の保存活用係としての研究報告書である。保存活用係の本来の業務から考えるとアウトサイダー的なものではあるが、もともと富岡製糸場総合研究センターという組織があり、これが保存活用係に改められたので引き継いでの仕事というものである。

今回は4本の論文が用意できた。報告書の刊行について常に感じることは執筆者がこれまでの研究の積み上げの上にさらに新たな研究分野や研究内容の解明と充実に挑戦していることである。そこで掲載順にその特色に触れてみたい。

今井の論文は、富岡製糸場が官営の模範工場という性格から経営に携わる者はともすると中央官庁から派遣された人材で構成されていたという潜入観念から脱却し、地元の有能な若手人材を積極的に登用した事実を地元に残る墓碑等から検証している。他方、俗に南三社の一つに数えられる群馬県特有の大組織である改良座繰製糸の甘楽社に関わった人材もその業務だけでなく他の関連分野に関わりながら成長してきた軌跡を追っている。

腰塚論文は、今まで究明してきた富岡製糸場内の埋蔵文化財の確認調査を引き続いて追いかける息の長い研究である。明治5年の創業以来、富岡製糸場は良質な生糸の大量生産を図ることが常に大きな命題であった。このために諸施設・設備のスクラップ・アンド・ビルドを繰り返した遺構が地下に眠っている。遺構の確認調査は継続的に実施されているが、本来は調査年度ごとの報告書の発行が理想的である。しかし単独の遺構は存在していないので、いわばその代替報告の意味合いを兼ねた特報的な位置づけのものである。

岡野論文は、本年度から富岡製糸場の女性労働環境調査委員会が発足したが、「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産登録に際して、ユネスコ世界遺産委員会が提言した命題を解決するものであり、本論文はその一環に位置づけられるものである。昭和20年代初頭に戦前の蚕糸統制株式会社が解散を命じられると間もなく労働組合が組織され、その後、片倉工業株式会社に復原されたが、その組合機関紙や社内報等を通して女性の労働環境の一端を窺うとした新しい分野の論文である。

最後の馬場論文は、本年度富岡市の友好都市である深谷市から派遣された馬場学芸員が同市出身で初代の富岡製糸場長の重責を担った尾高惇忠の肖像画に関する論文である。

本肖像画の興味深い点は富岡製糸場に寓居していた白鷗鳥羽義信なる画家が明治6年6月に松村の懇請によって描いた作品と記されていることである。松村とは工女募集が捗らないことを聞きつけた手斗村（現深谷市）の松村和志（62歳）が明治5年7月に若い工女たちを引き連れ、率先して入場し工女取締となった当人である。また、白鷗は同時期に工女取締青木照の求めに応じて同人の肖像画を描いていることも指摘しているが、本論文はまさに人事交流の中から生まれた成果である。

このように富岡製糸場を広く且つ深く解明するには多くの時間が必要となる。その一断面として活用していただければ幸いである。

富岡製糸場総合研究センター所長

今 井 幹 夫